

## 東海覚我徐念慈『新法螺先生譚』

をめぐって

——中国SF雑記

武田雅哉

はじめに

筆者は、かねてより、SF小説という些か特殊な文学の一ジャンルを通して中国近現代文学史を覗いてみたいと思っていた。ヨーロッパの古典的SF小説のいくつか、例えばフランシス・ゴドウィンの『月面の人』（英、1638）或いはジョン・ウィルキンスの『新世界と他天体に関する論述』（英、1638）などには、奇怪な能力を持つ存在として中国人が登場する。<sup>1)</sup>「中国人を登場させるべからず」という、ロナルド・ノックス『探偵小説十戒』のひとつが、中国の“偵探小説”を考察するに大いに刺激となるように、如上の事実を想起するに及んでは、しからば当の中国人はいかなるSF小説を書いてきたのか、という興味は一層そそられるのである。むろんこれも、最終的には中国文学史に溢れる異境譚などの空想物語と併せ考えてこそ面白いのであるが、中国におけるいわゆるSF小説の歴史は、翻訳、創作ともに清朝末期の“科学小説”に始まるとみてよいだろう。<sup>2)</sup> 清末の主要な小説雑誌を繙いてみても科学小説の翻訳は少なくない。また、これら外国の科学小説の影響下に些かの創作科学小説も出現した。そのひとつに「電世界」がある。——本稿では、この小説から説いて、中国SF史の萌芽期にあったある人物とその周辺とを覗いてみよう。

1) 参看、ジョセフ・ニーダム 李約瑟（英）『中国科学技術史』第四卷、天学、pp. 643—656、同書翻訳小組訳、科学出版社、1975年。Joseph Needham: “Science & Civilisation in China” Vol. III The Sciences of the Heavens, Cambridge University Press, 1959

2) 参看、拙文「清末科学小説概述」『科学文芸』1981年 第4期

## (一)

「電世界」は、『小説時報』の第一期（宣統元年九月，1909）に，その全十六回が掲載された。作者は高陽氏不才子。“理想小説”との角書きを有するが，ユートピアに題材を求めた，今日謂うところのSF小説である。

宣統一百零二年，電学大王によって，すべてが電化された大同世界が出現する。この世界は彼による種々の発明品にて運営されている。交通には“飛空電艦”，“自然電車”，“電翅”，教育には“電筒発音機”，“電光教育画”，農業には“電犁”，“電気肥料”。これら小道具をちりばめたエピソードが大王をめぐる展開される。例えば，電学大王は自ら発明せる“電気槍”もて，世界征服を企てる<sup>ナポレオン</sup>拿破侖十世の飛行艦隊を殲滅する。あるいは“海底電船”に乗って太平洋を調査中，日本沈没を予言(!)，法を講じて住民を大陸に移動させたが，ほどなくして果たせるかな，大地震とともに日本列島は太平洋の蜃気楼と消えた，など。最後に大王は宇宙船に乗り込み，地球を去ってゆく。

かの二十一，二十二両世紀の電学大王は已に去り，もはや影も形も残っておりません。在下のお話はここで完結といたしましょう。列位，もしさらなる物語をお聴きになりたくんば，在下，さらに編みますところの金星世界をばお待ち下され。

と結ぶが，「金星世界」なる小説については未詳。あるいは書かれなかったのかもしれない。

第一回「廿一紀，重ねて新舞台に登ること 中崑侖，初めて電気廠を試すこと」は，冒頭一段あって，

<sup>さて</sup>話説。宣統一百零二年，即ち西曆二千と十年，正月一日元旦のその日。中国は崑侖省<sup>ユートピア</sup>烏託邦府共和県に，帝国大電気工廠が新設されました。……

で本筋に入るが、作者はこの文の直前に次のような七言詩を置いている。

虚空世界任遊行	虚空世界， <sup>ほしいまま</sup> 任に遊行す
官礼麟經想太平	官礼，麟經，太平を想う
寄語小儒休咋舌	小儒 <sup>つたえ</sup> に寄語ん，咋舌 <sup>や</sup> を休めよと
先生本号法螺生	先生，本より法螺生 <sup>ほらせい</sup> と号す

“官礼”，“麟經”とは、儒学でいう五經の二、『礼記』、『春秋』のことであろう。“咋舌”とは驚いて舌を咬むこと。それだけの詩であり、小説の筋とは直接関係はないが、些か解せない。“法螺生”と号す“先生”とは、一体何者か？

いま、『新法螺先生譚』と題する、やはり清末の創作科学小説をみいだした。上述の七言詩と何やら因縁ありげな外題ではある。「電世界」に早きこと四年、光緒三十一年（1905）、小説林社から刊行された。作者は東海覚我徐念慈。該作と「電世界」とに架けられた“法螺生”なる言葉の裏には、科学小説をめぐる一段の逸史が隠されているのではないだろうか。

## (二)

徐念慈<sup>3)</sup>字を彦士，号を覚我，あるいは東海覚我とも号す。江蘇省昭文県（常熟）趙市の人。幼時より穎悟，算術，文章を能くした。戊戌の頃（光緒二十四年，1898），新学の潮流の影響を受け，光緒二十七年（1901）から翌年にかけて丁祖蔭ら同郷の志と組んで教学同盟会を興し，中国における教育の不足を訴えた。かくして彼は教育家として東奔西走したが，殊に女子教育の振興に努め，光緒三十年（1904）には競化女学堂を創設，教務主任となること二年，その管理庶務は夫人朱氏に任ねていた。

翌光緒三十一年（1905）九月には江蘇教育總會の成立に尽力し，幹事に挙げられた。光緒三十二年（1906）には常昭教育会成立，また，兩等小学を開校，丁祖蔭，曾樸らと私財を投じてこれを運営した。

3) 徐念慈の略伝は主として以下の文献に拠る。丁祖蔭「徐念慈先生行述」『小説林』第12期光緒三十四年（1908），楊世驥「徐念慈」『文苑譯注』中華書局 1945年

翻訳家としても著名であり、丁、曾二名と並んで「清末紹介西洋思潮の常熱三巨子」とも目される。<sup>4)</sup> 光緒二十八年（1902）頃には東亜訳書会に所属していたのであろうか、『政学報』に「莫児多群島記」<sup>5)</sup>を記載している。曾樸が小説林社を設立すると、徐は招かれて編輯主任にあたり、自らも翻訳『新舞台』<sup>6)</sup>、『新舞台二』<sup>7)</sup>、『黒行星』<sup>8)</sup>などのほか、創作『新法螺先生譚』を同社より刊行。光緒三十三年（1907）、雑誌『小説林』創刊、該誌の最高責任者として敏腕を揮う。『小説林』における徐の仕事には、論説「小説林縁起」、「余之小説観」、資料「丁未年小説界発行書目調査表」、翻訳「新舞台三」<sup>9)</sup>のほか、贅言及び潤辞、若干の詩文などがある。翌光緒三十四年（1908）六月十六日、病卒。この時の『小説林』、即ち第十二期は徐の追悼号となり、同時にまた終刊号となった。徐念慈の死はそのまま雑誌『小説林』の終焉でもあったのである。<sup>10)</sup>

『新法螺先生譚』。該書は小説林社から「小説林科学小説之一」として、光緒三十一年（1905）出版された。呉門天笑生（包天笑）の訳作「法螺先生譚」及び「法螺先生続譚」に、昭文東海覚我戯撰「新法螺先生譚」を併せて一冊としたものだが、外題は『新法螺』としている。

包天笑の訳作は、大江小波（巖谷小波）訳『法螺先生——独逸の部』並びに『続法螺先生——独逸の部』<sup>11)</sup>に拠る重訳であり、原作はドイツのミュンヒハウゼン男爵ものである。

『新法螺先生譚』のストーリーは次のごとし。

今日の科学が、いわゆる自然界の諸現象を研究するのみでこと足れりとして

4) 唐弢「《孤児記》与《侠女奴》」『訳書過眼録』——『晦庵書話』所収。生活・読書・新知三聯書店 1980年9月

5) 第1期～第3期、以下未詳。「日、海軍大軍医隠岐敬次郎著」とある。

6) 原作は押川春浪『英雄小説武俠の日本』（1902）光緒三十年（1904）

7) 原作は押川春浪『海国冒険奇譚新造軍艦』（1904）光緒三十一年（1905）

8) 原作は Simon Newcomb（米）“*The End of the World*” 黒岩涙香訳『英和对訳暗黒星』（1904）よりの転訳、光緒三十一年（1905）

9) 原作は押川春浪『戦時英雄小説武俠艦隊』（1904）第2期～第12期連載。

10) 従来、該誌の主編は黄摩西とされてきたが、事実上、徐念慈とすべきであろう。このことはすでに黄霖が「清末革命派小説家瑣記」『復旦学报——社会科学版』1981年第5期で説くところである。

11) 大江小波編『世界お伽噺』第七篇（博物館、1899. 7）および第十五篇（同館 1900. 3）

いることに不満を抱く法螺先生、ある日思いにふけるまま高山に登ったが、忽然として吹いた大風のため、靈魂と肉体とが分離してしまい、エヴェレストの頂に落下した。はじめは嘆いていたものの、これを利用して種々の実験を試みんことを決意する。この靈魂なるもの、一種不可思議の発光能力を持つことを発見、これを用いて世界を照らすが、この奇怪な光に科学者どもは議論紛紛、先生これを見て科学の幼稚時代にあるを笑う。祖国を照らしてみたところ、その頽廢の様を目にするのみでこれを嘆じていたところ、山頂より落下してしまった。ところが靈魂の四分の一と肉体とを残して、弾力性のゆえに地球を脱した残りの靈魂は月に衝突、数多のクレーターを月面にとどめた。地上の靈魂は肉体と合体したが、足もとにあった火山が突然大噴火をおこし、空中高く飛ばされてしまう。落下したものの今度はそのまま火口に入ってしまう、行き着いた処は地底国、黄色人種の祖たる黄という姓の白髪の老人に遭遇す。老人は人間の性質の素たる各種元素を司るが、今は善根性が侵蝕されていると嘆く。国民の眠りを醒ますとすれども法なし。先生、老人に別れを告げ、急ぎゆけば、池の中に足を踏み外して沈みゆく。出たところは何処……？

さて、話変わって月と衝突した靈魂はその後水星、金星、太陽をめぐる、造人術などの奇態な様を目視するが、やがて地球に戻り来たり、地底国から出た肉体と合体、気が付けば地中海に浮かんでおり、竜旗をひるがえした戦闘艦隊にめぐりあって助けられる。きけばこれは禍中にある中国を救わんとする義勇艦隊であった。そのまま上海に帰ると、催眠術の講習会がもよおされており、先生、動物磁気学に興味を抱き、更に“脳電”（今謂う精神感応）なるものを研究、上海に脳電学習の学校を建て、みるまに学生は増えてゆくが、ためにあらゆる通信機器が不要となり、工商業界に大打撃を与えることとなって、失業者は続出、不満分子には先生を攻撃するものもあり、これを避けるべくしばし姿をくらまさぬわけにはいかなかったという結末。

徐念慈は物語に入る前に説明する。甲辰の夏（光緒三十年、1904）包天笑が訳した「法螺先生譚」正統二巻を見せてもらい、大いに興を覚え、顰に効うかたちでかようなものを綴ってみたのだ、と。

これは徐の創作のきっかけに包天笑の訳作があったことを物語るものである

が、包天笑の科学小説における作業には、『鉄世界』<sup>12)</sup>、『秘密使者』<sup>13)</sup>などのヴェルヌもの、押川春浪の『千年後之世界』<sup>14)</sup>の翻訳のほか、若干の創作があり、包自身、科学小説への関心は小さなものではなかったようである。

包天笑には、自伝『釧影樓回憶録』<sup>15)</sup>があるが、書中、徐念慈の名がいくつか見える。例えば青州府中学校で教鞭を執っていた包天笑、省命によって体操課を設けねばならなくなり、早速上海に赴いて友人に相談したが、徐念慈は彼の弟徐粹庵を推してこの任にあたらせたこと。<sup>16)</sup> また、上海に移った包を小説林社に招くべく彼の宿に赴いたのは徐念慈その人であったが、のち、小説林社に在った二人は各々長篇小説をひとつものにしようと語り合ったという。<sup>17)</sup> ともに日本語に通じていたこともあり、ひとり「法螺先生譚」のみならず、相互に日文作品を紹介し合い、影響を及ぼし合ったであろうこと想像に難くない。

### (三)

『新法螺先生譚』一万一千余字には、当時耳に新しかったであろう科学用語が多く<sup>ちりば</sup>鑲められている。例えば、“諸星球所出之各吸力”，“愛涅耳其”，“離心力”，“墜物漸加速率之公例”，“造人術”，“洗腦”，“循環系統”，“衛星”，“微秒”，“動物磁気学”，“脳電”の如し。徐念慈がこれらの用語を、清末という時期にあって駆使している事実を、端睨すべからざるものとして驚きを抱く向きもある<sup>18)</sup>が、実はさほどのことでもない。清朝末期、通俗科学解説文のごときものが盛んに発表された。魯迅による「ラジウム論」や、「中国地質略論」は容易に思い浮かぶが、例えばいま、光緒二十八年(1902)に創刊された『政芸通報』

12) 原題 “*Les Cing cents millions de la Begum*” (1879). 森田思軒訳『鉄世界』(1887)よりの転訳。文明書局光緒二十九年(1903)

13) 原題 “*Michel Strogoff*” (1876) 森田思軒訳『警使者』(1888)よりの転訳。小説林社 光緒三十一年(1905)

14) 原題『千年後の世界』(1903) 群学社 光緒三十年(1904)

15) 香港大華出版社 1971年6月

16) 「記青州府中学堂，二」

17) 「在小説林」

18) 葉永烈「清朝末年的科学幻想小説」『光明日報』1981年8月7日。のち書き改めて『科幻小説参考資料』No. 3 1981年に掲載。この文は『新法螺先生譚』と徐念慈を、中国最初の SF, SF 作家として紹介したものである。

を繙いてみると、「水底行船」,「人工造雨」,「星球相通之証明」,「空中戦具」,「助脳電機」,「空際行舟」,「潜行水雷艇之發明」,「新式空中飛行船」,「地球与火星通信」,「機器製之人」などなど、最新の、あるいは空想の科学技術を説く篇目が許多く見出だされる。他の雑誌も多かれ少なかれこの類いの文章を掲載している。徐念慈はおそらくそのような文章を通して通俗科学知識を得たのであろう。

それでは徐念慈にとっての科学小説は如何なるものであったろうか。まずは科学小説に言及した当時の文章を二種みてみよう。

科学小説なるものは文明世界の先導なり。世に科学の書を喜ばぬ者あれども、科学小説を喜ばぬ者未だ有らず。則ちその文明思想を輸入すること最も敏捷にして、その因を種<sup>たねま</sup>いて果を穫すること、先に氏（注、ジュール・ヴェルヌ）著す所の『海底二万里』有りて、今日英国学士に海底潜行船の製有り。……凡そ斯<sup>か</sup>く種<sup>いろいろ</sup>種<sup>たねま</sup>, 枚挙に勝らず。嗚呼。我、迦爾威尼<sup>ジュール・ヴェルヌ</sup>の科学小説を讀みて、我、九万里の大圏の小さきを覚ゆ、我、二十世紀の進歩の遅きを恨む。（包天笑、『鉄世界』訳余贅言、光緒二十九年、1903）

蓋し、科学を臚陳すれば常人これを厭う。篇を閲し終えぬに、輒<sup>すぐさ</sup>ま睡気を催す。人に強<sup>こば</sup>いれば難まれること必定である。ひとり小説の能力に仮托せば、優孟の衣冠ではないが、理<sup>と</sup>を析くこと深遠であつても、能く脳ミソに浸透し、厭倦を生じない。……故に、かりにも今日の訳界の欠点を補わんとするならば、中国の民衆を導き、以て進行するに、必ず科学小説より始めねばならない。（魯迅『月界旅行』弁言、<sup>19</sup>光緒二十九年、1903）

いずれも科学小説の啓蒙作用を強調したものであり、清末小説理論の基本路線を遵守している。徐念慈もまた「小説林縁起」において、科学小説に描かれる月旅行、地底旅行、海底旅行などを、「皆、科学の理想を本とし、自然を超越して、その進化を促せしものなり」<sup>20</sup>とて、科学小説の“種因穫果”を説い

19) 光緒二十九年(1903)十月。東京進化社

20) 『小説林』第1期、光緒三十三年(1907)一月

ているところをみると、包天笑、魯迅らと大きく変わるところはないようである。

しかるに、これらの観点も、事実上、外国科学小説の紹介という作業とともにあった。彼らがいかなる科学小説を創作したかは、おそらくまた別問題である。これについては他日別稿にて。

また、これに関連して、徐の科学観といったようなものを見てみよう。次に引くは『新法螺先生譚』冒頭部、法螺先生自言自语するところである。

科学者は僅かに礦物界、植物界、動物界における種種の現象、種種の考察に拠って、万物はここに尽けり、万理はここに尽けりとするが、果たしてそうであるならば、この世には科学のほかにはいわゆる学問はなく、また発明もないことになるが、実際はそうではない。何故か？

余はこの問題について考えれば考えるほど疑い、疑えば疑うほど考え、後には奮然として曰く、余、苟くも諸家の説に局局としておるに、これを超脱することができぬ。その炬たいまつの如き眼光もて目を見張り、その空前の手段を展開せんとしても、これまた学界の奴隸であるにすぎぬのだ。

法螺先生は、この超自然科学といったようなものにこだわり、その具体である“脳電”をもって作品の山場とする。さらに二年後、『小説林』に訳載された「科学小説電冠」<sup>21)</sup>の「覚我贅言」には次のように説く。

余、嘗て語りし如く、今世科学の発明、また已に至れりといえども、これは僅かに物質上の発明のみであり、虚空界の発明においては、なおまだその端をも肇ひらいていないのである。……催眠術が科学に列し、動物電気の説明がなされてより、虚空界は稍くその朕兆ようやを露まぎしした。吾人は知らず、千万世紀の後、その推闡するところいづこまで達するかを。吾人は自ら恨む、吾が生おの太おいに早きを、また太おいに短かきを。(第二期)

21) 英、佳漢著、陳鴻壁訳。第1期～第8期連載。原作、原作者など未詳。



……余、第十六回を読みて言う。近代科学、日に日に発達すれども、僅かに物質上の発明のみであり、精神上の発明はなおまだよくその源委と意味とを窮めてはいないのである。その義を知る者にしてはじめてこれと鬼を論ずることができるのだ。(第七期)

“虚空界の発明”，あるいは“精神上の発明”の主張が面白い。因みに、同郷丁祖蔭による雑誌『女子世界』、光緒三十年（1904）の出版広告に、「虚空世界廣弘明論 大正一角」なる書名を見いだしたが、「晚清小説目」などにも見えず、畢竟出版されたものや否や不明。『女子世界』には小説の連載もしていた徐念慈であつてみれば、出版されたか否かにかかわらず、該書の存在を知っていた可能性は大いにある。しかるにその詳しきこと、また彼の謂う“虚空界の発明”との繋りなどは目下不明。待考。

ところでここに引いた「覚我贅言」前者の中で、催眠術がうんぬんとあり、また『新法螺先生譚』にも上海で催眠術の講習会がもよおされていたとの一段があるが、この流行は事実であつたらしい。当時の雑誌をめぐっていると、この関係の広告にはよくぶつかる。ひとつ付け加えると、当時『催眠術』<sup>22)</sup>なる書が出版されていたが、その目次には、「動物磁気説」、「心性相通」、「靈交神遊」、「五感轉換」、「神通魔力」などの節目がみえる。該書の著者は余人ならず、清末革命派の志士、陶成章である。——筆者はここで、荒俣宏の「SFの周囲をとり囲んだ文学や科学の情況が、SFよりもはるかにSF的であり、なおかつ前衛的であつた」ということばを想起してしまう。<sup>23)</sup>「革命と“虚空界”の科学」とは、また面白からずや。

閑話休題。——辛亥革命、この時代の変相図の一齣を見ることなく、徐念慈はあわただしくこの世を去ってゆく。

22) 商務印書館、光緒三十三年（1907）六月3版。いま、浙江省辛亥革命史研究会、浙江省図書館編『辛亥革命浙江史料選輯』浙江人民出版社 1981年8月、に拠った。

23) 荒俣宏『理科系の文学誌』工作舎 1981年6月、p. 388

## (四)

徐の晩年の状況を、『文苑譚往』の記載に従って述すれば、次のようになる。徐念慈は小説林社の総会において、参考書を専門に扱う部門の設立を主張、これに危険性を見、極力反対した曾樸を押し切って、ついに宏文館を設立、辞典や地図の類の書籍を編輯した。しかるに彼の理想を裏切るがごとく原価はかさみ、また販路を推广するのが容易でなく、資本にも限界があることとて、大いに困難を生じた。徐の懸命なる努力にもかかわらず、社の損失は巨額に達し、全く收拾のつかぬ状態とはなった。彼自身の収入さえも毎月満身に収められなくなり、前後して競存公学、愛国女学、尚公小学などで持業を受け持ち、生活を維持せんと努めたのであったが、小説林社が倒産する一年前、疲労が病に到り、他界。<sup>よわい</sup>齡わずかに三十四歳——。

教育への理想に燃え、ために自らを滅ぼした徐の死に至る道程は、法螺先生を宛然とさせるものがある。ヨーロッパの伝説に従っていうならば、一個の人間が自らの分ドッペルゲンゲル身ドッペルゲンゲルを見た以上、もはやこの世に永くは在り得ぬのである。徐念慈が自らの筆もて分ドッペルゲンゲル身ドッペルゲンゲルを描いてしまった事実は筆者を魅了するものであるが、今はこれに深くは言い及ばない。

徐念慈が死去した光緒三十四年六月の『小説林』は、徐念慈追悼号となった。丁祖蔭による「徐念慈先生行述」ほか、多くの詩文が寄せられているが、ここには包天笑の名はない。彼は宏文館に関しては徐のやり方に賛成できかねていたものようであり、のちに、

この時彼らはまた宏文館とやらを始めるだの、『博物大辞典』とやらを編輯するだのしていたが、その頃私はもう小説林にはいなかった。つまりは資本は已に底をつき、大吉を閉じていたのである。

と言っているのではあるが、<sup>24)</sup>徐死去の翌年に、『英徳戦争未来記』なる翻訳小

24) 17) に同じ

説を、『東海覚我訳、天笑校補』として出版している。<sup>25)</sup>これはまさに包天笑からの弔礼であったのかもしれない。

そして同年九月、やはり包天笑が編輯にあたっていた雑誌『小説時報』創刊号に、「電世界」が掲載される。その第一回に附せられた前掲七言詩にみえる“法螺生”，“虚空世界”などの辞句が、徐念慈とその作品を暗示しているとの蓋然性、少なからざること言うを埃たないだろう。加えて、第一回の章題、「廿一紀重登新舞台 中崑侖初試電気廠」も、徐念慈によって精力的に翻訳紹介されたところの『新舞台』シリーズを連想させる。

楊世驥は翻訳科学小説『黒行星』のことを説いて、いくつかの清末小説の名を挙げ、「すべてその隠然たる誘発を受けて撰述されたものである」と述べているが、<sup>26)</sup>『新法螺先生譚』は如何？ 該書刊行後の反響については目下資料に欠いており、サッパリわからないのであるが、ひとつ注目すべきは『広益叢報』の第132期から第139期にかけて（即ち光緒三十三年、1907）、「新新法螺天話——科学之一斑」なるものが、「東海覚我戯訳」として連載されていることである。<sup>27)</sup>してみれば、『新法螺先生譚』と「新新法螺天話」との間に「新新法螺先生」といったようなものが彼によって綴られたであろうこと想像に難くないが、これは未だ詳らかにしない。おそらくは三度にわたって“法螺生”ということばもて著訳をした徐は、余程このことばが気に入っていたとみえる。これは、あるいは読者の反響とみることもできるかもしれない。

「電世界」の七言詩は、その人の名を明言せぬがゆえに却って、“科学小説”といえは“法螺生”，そして“法螺生”といえは容易にその名が連想されたところの清末の一人物、徐念慈その人への献辞であったのと同時に、一篇の科学小説の開端を招くべく置かれた、いわば序詞ではなかったろうか。

清朝末期、徐念慈という男によって一陣の“科学小説風”が吹いたのである。

（たけだ まさや）

25) 英 衛梨雅著，一冊。中国図書公司。原作，原作者未詳。

26) 3) に同じ

27) 原作，原作者未詳。